歯学部

三月に報告書出版、教育研究評価が今後の課題

歯学部
自己点検・評価委員会
委員長
岡本莫

はじめに

歯学部は昭和四十年四月に創立されてから、十年をエポックとして、教育、研究、施設、その他の活動など、歯学部のあゆみを総まとめにした記念誌を作成し、内外の関係者に広く公表してきた。その歯学部が昨年で創立二十八年目を迎え、そろそろ三十周年誌出版の声が出ようとした矢先、大学設置基準の改正に伴って広島大学自己点検・評価規程が定められ、それに基づいて歯学部自己点検・評価委員会内規が制定されるに至った。

報告書作成への経過

委員会のメンバーは、基礎系および臨床系講座の教官各二名、研究科担当教官二名、附属学校（歯科衛生士、歯科技工士）校長各一名、事務部長一名の計九名で構成され、委員長にはこの中から私が学部長より指名され、平成四年度末を目途に報告書を作成するよう諮問を受けた。

七月二十日の第一回委員会において、先ず自己点検・評価に関する事項が審議され、広島大学親規程に定める十三項目を幾分修正し、新たに「大学院教育」の項を設けて、原則過去三年間の実績を点検することとした。次いで、これら項目について役割分担を行い、毎月定期的に細目内容の検討を進めていった。その後八回にわたって精力的に編集校正が行われ、予定どおり三月末日歯学部自己点検・評価報告書第一号が二百三十四ページにまとまり、五百部印刷発行され、過日歯学部構成員、その他関連部門に配布されたところである。

現状と問題点

歯学部の理念目標は、建学以来「歯学に関する学理を究め、広く知識と技能を授けて有能な歯科医師を養成し、併せて歯学発展のため指導的人材の育成に努める」であり、我が学部の特性である歯科医師養成機関としては、全国的に十分に誇りうる実績を挙げてきた。しかし、これからの歯科医学が今までとは比べものにならないスピードで進歩することを考えるとき、教官の弛まない研鑽はもちろん、それに対応する施設、機器の積極的更新整備がなされなければ、歯学部の将来は危ういと言える。

今回の点検を顧みて、歯学部の一番の問題点は大学院教育と見做される。歯学研究科が設置されて二十年を経過し、いまだ三十名の定員に対して充足率は平均五十％前後であり、しかも入学者のほとんどは臨床系専攻で、基礎系へは毎年二、三名とアンバランスである。また、二十年間の博士の学位取得者は二百五十六名と不十分な数である。文部省が今後の主要政策を大学院の量的整備におき、広島大学もそれに積極的な取り組みを始めた今、当然歯学部も新構想が打ち出されなければならない。それには先ず従来の各大学院歯学研究科の画一的な体制に対する意識改革を図る必要がある。具体的には、現行の基礎、臨床の二専攻の区分を廃止し、学部講座の枠組みにとらわれない相互の融合による新体制を策定する。新たに修士課程を設置する。医歯薬系各研究科間の協力に基づく基礎生命科学分野の独立専攻設置を目指す、など問題点解決のいくつかが提案されている。

最後に

今回は時間的制約もあって、点検の域を出ず、報告書としては中間まとめであることを自ら認めるものである。次には一歩進んだ教育研究の現状評価を行う予定であるが、自己評価が外部から向けられる厳しい社会の視線がなければ、その自動的な達成は困難であることから、究極的には評価は第三者の実地視察によって判定されるであろう。